

CS06 伊藤 桂太郎

指導教員 小出 由起夫 山館 順

## 1. はじめに

情報化の進展やコンピュータの発達は、発掘調査から研究室での分析・研究にまで大きな影響を与えている。考古学研究において最も重要なのは、データ・資料の収集・整理である。考古学の情報は個別の遺跡・遺構ごとに、全国に分散した形で生産されるため、まずどこに、どのようなデータや資料が存在しているのかを知ることから始まり、その収集に多大な労力と時間を費やすことになる。もし何らかの工夫によって、個々の研究者が収集したこれらの考古学資料をお互いに利用し合えるようになれば、それは考古学研究に大きく寄与するものと考えられる。

近年における考古学資料のデータベース化は、各地域の自治体の埋蔵文化財センターや教育委員会・大学などの各方面で進行している。しかし、そこには各機関毎に多くのバラつきがある。また利用者である現場の研究者や自治体職員が抱く不具合や不満も多く存在する。

本論では、実際のデータベース化を行っている資料と、発掘調査報告書を対象として、一地域における中世の城館遺跡出土遺物のデータベース化について、現状と問題点を挙げ、そこにどのような改良を加えればより良い研究資料として活用可能となるか、具体的な改善策を提示し、さらにその結果を考察することとする。

## 2. 問題点と解決案

ある地域の自治体が作成した発掘調査報告書と実際の利用者が作成した報告書を比較し、共有化を目指す上で重要な問題点を挙げる。

### 2.1. 位置情報の問題

グリッドや遺構・地点など遺物出土位置を地図で照合する必要があるが、特定の位置情報が記録されているわけではない。

近年、積極的な応用がなされ始めているものの1つに、地理情報システム(以下 GIS)がある。GISを利用することにより、これまで遺跡分布図の作成といった単純な分析しか行えなかったのが、GISにより高度な分析が行えるようになり、今後のデータベース処理には欠かすことはできない。

### 2.2. 画像の問題

遺物の分類、項目には具体的な形状や模様が表示されていない。時代ごとによって多くの特徴があるので、対象となる時代に使われていたものなど示す必要がある。とくに、実測図、写真といった2次元の情報しか利用できなかった考古資料を、コンピュータ上に3次元のイメージ情報として蓄積することによって、さまざまな活用が行え、これまでとはまったく異なる視点からの分析が可能となる。

## 3. 結果

自治体が作成したものと、利用者が作成した発掘調査報告書を、前記に列挙した問題点と解決案を用いて資料の正規化を行い、共有化を目指した報告書の作成を行った。作成した発掘調査報告書を図1に示す。

発掘調査番号	資料No.	年月日
名称(ふりがな)	変更後の名称(ふりがな)	
種別	<input type="checkbox"/> 遺跡・遺構 <input type="checkbox"/> 遺物 <input type="checkbox"/> 土器 <input type="checkbox"/> 瓦 <input type="checkbox"/> 銅器 <input type="checkbox"/> 鉄器 <input type="checkbox"/> 石 <input type="checkbox"/> 骨 <input type="checkbox"/> 土 <input type="checkbox"/> 漆器 <input type="checkbox"/> 織物 <input type="checkbox"/> 紙 <input type="checkbox"/> 木 <input type="checkbox"/> 竹 <input type="checkbox"/> 石 <input type="checkbox"/> 土 <input type="checkbox"/> 骨 <input type="checkbox"/> 土 <input type="checkbox"/> 漆器 <input type="checkbox"/> 織物 <input type="checkbox"/> 紙 <input type="checkbox"/> 木 <input type="checkbox"/> 竹	
時代	旧石器・縄文(期・古期) 新石器・縄文(期・古期) 弥生 古墳 平安 鎌倉 室町 戦国 江戸	
所在地	<input type="checkbox"/> 国 <input type="checkbox"/> 都府県 <input type="checkbox"/> 市町村	<input type="checkbox"/> 発見の経緯 <input type="checkbox"/> 周辺の環境状況
旧称名	<input type="checkbox"/> 遺跡名 <input type="checkbox"/> 遺構名 <input type="checkbox"/> 遺物名	
現状(保存状態)	<input type="checkbox"/> 埋蔵 <input type="checkbox"/> 発掘 <input type="checkbox"/> 展示 <input type="checkbox"/> 廃棄	
遺構・出土品	<input type="checkbox"/> 遺構名 <input type="checkbox"/> 出土品名	
長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
重量(g)	集合資料No.	
備考		
調査年月日	年月日	調査者氏名

図1 正規化した発掘調査報告書

## 4. 評価・今後の発展

実際に作成した発掘調査報告書を用いてWebを利用したデータベースを作成し、複数の利用者が共有して情報を扱えるか実験する必要がある。そこで新たな不具合や欠点も見つかることが予想されるが、本論で示した正規化による修復作業を繰り返すことで、最適化・共有化された発掘調査報告書に近づける作業を継続したい。

## 文献

- [1]加藤晋平, 藤本強.「考古学と自然科学」. ⑤考古学と調査・情報処理. 同成社.  
 [2]安蒜政雄.「考古学 キーワード」. 有斐閣双書.